

環境民俗学の視点と河川漁撈研究

伊藤 廣之

要旨

本稿では、一九九〇年代以降に生まれた、自然や環境を対象とする民俗学の研究として、野本寛一の生態民俗学、篠原徹の民俗自然誌、鳥越皓之の環境民俗学、菅豊の人と環境の民俗学を取り上げ、彼らがどのように自然や環境を捉えようとしていたのか、その論点の検討をおこなった。そのうえで、菅がコモンス論を展開するうえで用いた視点をヒントにしながら、鳥越が提示した環境民俗学の三つの視点を整理・統合し、「自然と人の関係性」と、環境を媒介とした「人と人の関係性」という二つの視点を提示した。そのうえで、漁撈研究のための分析枠組みとして「漁撈をめぐる三つの関係性」を設定し、今後の河川漁撈研究について研究課題と研究方法を提示した。

はじめに

筆者は前稿^①において生業研究の総括をおこない、従来の生業研究では「人の生」を明らかにするという点で手つかずのところが多く、そこに生業研究の課題があることを指摘した。また河川漁撈研究について、漁具・漁法といった漁撈技術に関する研究の蓄積は進んだものの、河川漁撈の主体である川漁師の川・魚・自然に対する認識や、川漁師の生活の総体を捉えるといった点にあまり進展が見られないことを明らかにした。こうした川漁師の自然観や環境観などの解明、あるいは川漁師の生活総体の把握のた

めには、河川漁撈の主体である川漁師の視点に立って、川漁師と自然とのかわり、漁撈をととした川漁師同士のかかわりなどを探っていく必要がある。そうした「川漁師の視点」からの研究を進めていくうえで、有力な手がかりを与えてくれるのが環境民俗学である。

一九八〇年代になって、さまざまな学問領域において、自然や環境に対する関心が高まるなかで、民俗学においても自然や環境を取り扱う研究が始まり、これまでに多くの研究成果が蓄積されている。そうした状況なかで、民俗学に新たな地平を切り拓くものとして環境民俗学が提唱されるに至った〔鳥越 一九九四〕。環境民俗学の提唱者・鳥越皓之は、環境民俗

学を「環境と人間との関係を研究する民俗学の一分野」とし、具体的には「人びとは暮らしのなかで自分を取り囲む環境をどのように利用・管理しつづけてきたか、人びとはどのような環境観をもって暮らしてきたか、というような課題を研究することをつうじて、今後の人びとの暮らしのありさまを問う」〔鳥越 一九九九b 四三五〕ものと規定した。鳥越による環境民俗学の提唱以降、民俗学における自然や環境をめぐる研究は、篠原徹〔篠原 一九九四〕・菅豊〔菅 二〇〇一a〕・山泰幸ほか〔山・川田・古川 二〇〇八〕によって議論が深められ、今日に至っている。

本稿では、一九八〇年代後半以降の自然や環境を対象とする民俗学の研究を取り上げ、それぞれの研究者が自然や環境をどのように捉えていたのかを検討していく。具体的には、「民俗連鎖」という独自の視点から自然と民俗事象との関係を捉えようとした野本寛一の生態民俗学、地域に暮らす人びとの自然に関する民俗知識の束を抽出し、それを植物分類学や生態学的手法を取り入れながらモノグラフとして描き出そうとした篠原徹の民俗自然誌、自然環境と人間のかかわりを民俗学的視点から研究することを提起した鳥越皓之の環境民俗学、サケ漁の川を事例としてコモンスの生成と変容を民俗誌として詳述した菅豊の人と環境の民俗学を中心に取り上げ、問題関心・研究対象・分析方法などを検討し、自然や環境の捉え方を明らかにしていく。そのうえで、環境民俗学の視点に学びつつ、河川漁撈研究を進めるための分析枠組みを設定するとともに、今後の河川漁撈研究における問題設定と研究方法を提示することにした。

一 野本寛一と生態民俗学

野本寛一の『生態民俗学序説』は、「生態民俗学」の視点から叙述された自然と人間のかかわりについての民俗誌である。野本のいう生態民俗学とは、「生態学的な視点でなるべく多様な民俗を見つめ直」すことを目的とするもので、「生態学的な視点に立った民俗学」あるいは「生態学的な着眼・発想による民俗現象の研究」〔野本 一九八七a 一五〕をさしている。野本が生態民俗学を発想するに至った原点は、大井川流域での民俗調査にあった。上流域から下流域にかけて変化する植生と家屋の屋根との関係が、生態学でいう「環境傾度」に相当する問題ではないかと考えたのである。

こうした生態学的な発想を背景にしなが、野本は従来、民俗学が総じて民俗事象をテーマ別・項目別に扱ってきたことに対する反省をふまえ、生態学のみならず「食物連鎖」と呼ばれている概念をヒントにしなが、生態民俗学の切り口のひとつとして「民俗連鎖」という視点を考え出した〔野本 一九八七b 三〕。それは「連鎖」という視点から民俗事象を捉え直すことで、「民俗事象相互の関係やその連続性のダイナミクス」を浮かび上げ、これまで「テーマとテーマの間から漏れて見失われてきた微細な営みにも光」〔野本 一九八七a 一六〕を当てようとするものであった。

野本の『生態民俗学序説』には、生態民俗学の構想とそれを構想するに至った多彩な民俗事例が、「民俗連鎖」「環境適応」「動植物の生態と上層民俗」の三つのテーマのもとに記されている。生態民俗学の構想に関して、野本は「自然環境、人為的環境、環境への適応、環境変革などを包括した『環境民俗学』が将来において成立する可能性は充分にある」〔野本 一九八七a 一七〕とし、生態民俗学が環境民俗学の主翼に位置づけられると

した。しかしながら、環境民俗学そのものについては、その可能性を示すにとどまり、見取り図を提示するまでには至らなかった。

野本の環境民俗学については、『生態民俗学序説』の九年後に刊行された『講座日本の民俗学4 環境の民俗』の「総説 環境の民俗」のなかで、そのアウトラインが示されている。野本は「環境民俗学」に相当するものとして「環境民俗の研究」ということばをもちいてその構想を示している。まず「環境民俗の研究」とは、「人が暮らしや生業の中でいかに環境とかわかってきたのかを、多角的・有機的に、より詳細に、そして総合的に学ぶことにほかならない」とし、それは「暮らしや生業と複雑にからむ環境構成要素、民俗の生成土壌としての環境要素を意識化することから始まる」〔野本 一九九六 四〕とする。そのうえで、民俗学の研究方法として、「生活誌的・民俗誌的研究」と、「特定の主題を設定して日本全体をフィールドとするテーマ主義的な研究」とがあることをふまえて、「環境民俗の研究」にも、そうした二つの流れがあり得ると指摘する〔野本 一九九六 一〇〕。

このように、一九八七年に提唱された生態民俗学と、一九九六年に論じられた「環境民俗の研究」の両者を見ていくと、そこには共通した野本独自の視点を見いだすことができる。それは野本のことばを借りていえば「民俗生成論」²⁾である。野本はつぎのように述べている。「人間の営みである民俗現象を生態学的に見つめようとすることは、人間を大自然の生態系のなかに据え直し、民俗現象を自然環境のなかでとらえ直すことにもなる。その意味で、『生態民俗学』は民俗の発生を根源的に確かめることになり、それは新時代の人間研究にもつながるはずである」〔野本 一九八七 a 一七〕と。

ここで野本がいう「民俗の発生を根源的に確かめる」というのは、「民俗

文化発生の基層部分」にまでさかのぼり、「民俗生成」の基点と展開を探索」することを指している。野本は『生態民俗学序説』を「筆者の構想する『日本民俗生成論』の一面をなすものである」〔野本 一九八七 a 一七〕と述べているように、野本の生態民俗学は「民俗生成論」の一部分を構成するものであり、方法的には両者は表裏一体の関係にあったともいえる。民俗生成論は民俗の発生・起源をたどろうとするものであるが、そのなかで環境の位置付けはどのようになっていっているであろうか。たとえば、同年の別の論文「生態民俗学の構造」では、環境は「民俗生成の根幹や生成基盤」〔野本 一九八七 b 二〕とされている。野本にとって、環境は民俗の生成の根幹や基盤と位置付けられていたのである。こうした環境に対する捉え方は、「総説 環境の民俗」のなかでも「民俗の生成土壌としての環境要素」〔野本 一九九六 四〕ということばで語られている。

このように野本の環境の捉え方は、自然や環境を「民俗の生成基盤」とするものであり、環境と民俗との関係性という点で言えば、環境が民俗のあり方を規定しているとの視点に立つものである。しかし、環境と民俗との関係性を論じる野本の視点の根底には民俗生成論があり、そこには歴史的に古代にまで遡って民俗の発生や起源を求めようとする考え方があった。民俗生成論は、環境と民俗の関係性を「自然と人間のかかわり」に止めるのではなく、古代と直結させて起源論・発生論の立場から捉えようとするものであり、研究方法論としてはそこに批判を免れることができない要因があった〔篠原 一九八七 一三五、菅 二〇〇一 a 一五〕。ただし、『生態民俗学序説』を含め、『共生のフォークロア・民俗の環境思想』(青土社、一九九四年)・『海岸環境民俗論』(白水社、一九九五年)・『人と自然と 四万十川民俗誌』(雄山閣出版、一九九九年)など一連の著作は、

人びとの環境とのつきあい方を豊富な民俗事例によって示しており、環境民俗学の研究を進めていくうえで共有の財産といえるものである。

二 篠原徹と民俗自然誌

篠原徹には自然や環境に関する代表的な著作として『自然と民俗―心意のなかの動植物―』（一九九〇年）、『海と山の民俗自然誌』（一九九五年）、『自然を生きる技術―暮らしの民俗自然誌』（二〇〇五年）がある。ここでは、これらの著作をとおして、篠原がどのような視点から自然や環境を捉えようとしていたのかを見てみよう。

『自然と民俗―心意のなかの動植物―』は山村や島における植物利用や命名、動物に関する民俗知識、鵜や鵜飼などをテーマとして自然と人間の関係を分析したもので、そこには篠原が提唱する「民俗自然誌」の背景となる視点や考え方が示されている。『自然と民俗―心意のなかの動植物―』のなかで、篠原は研究対象を「資源としての環境」と定めたうえで、「ひとつの地域の環境に対する環境イメージを抽出」することをめざした。篠原は「資源としての環境はそこに住む人々が環境に与えた意味の総体」であるとし、「そこに住む人々の自然に対する民俗的知識の束」を取り出し、それを分析することによって自然と人間の関係を論じようとした（篠原 一九九〇 九）。そのうえで篠原は、地域に住む人びとの自然と人間の関係を取り上げるためには、「その地域における相互連関的な一連の関係の総体を民俗学的に分析する必要がある」とし、そのためには「具体的な民俗誌レベルでまず明らかにしなければ」（篠原 一九九〇 一〇）ならないとする。そうした方法的認識にもとづき、植生の異なる落葉広葉樹林帯の村と

亜熱帯の村を取り上げ、「生活様式にとって環境のもつ意味の具体的な相違を明らかにし」（篠原 一九九〇 一一）ようとしたのであった。

このように、篠原が研究対象とした「資源としての環境」は、具体的に形成された「環境イメージ」であった。つまり篠原は、環境を実体論として捉えるのではなく、いわば認識論のレベルで捉えていこうとしたのである（福田 一九九二 二二）。篠原はそれを「地域の民俗知識の束としての自然観」、または「民俗自然観」（篠原 一九九〇 一一）と呼び、そうしたものを地域の民俗誌のなかで捉えようとする点に方法上の独自の主張があったといえる。

つぎに『海と山の民俗自然誌』（一九九五年）は、『自然と民俗―心意のなかの動植物―』で提示された方法にもとづき、人間と自然のかかわりを自然誌と民俗誌を融合させたモノグラフとして描き出そうとする試みであった。篠原が民俗自然誌を提起するにあたってキーワードとしたのが「自然知」である。篠原のいう「自然知」とは、「文字知」に対する概念とされ、「技能」の背後にあって「生業の中で自然と対峙して獲得され、伝承される知識の総体」（篠原 一九九五 二六七）をさす。これは『自然と民俗―心意のなかの動植物―』のなかで「民俗的知識の束」と呼ばれていたものと同義である。「民俗自然誌」の構想を進めていくなかで、「民俗的知識の束」が「自然知」という新たな概念として整えられていったといえる。

篠原は自然誌・民俗誌・民俗自然誌の違いについて、つぎのように規定している。すなわち、「動物や植物の生活に関する科学的な記述を自然誌」とし、「ある生業を営む人々の社会的集団の生活総体を記述するものを民俗誌」とする。そのうえで、「民俗と生態をつなぐもの」として「ある社会

集団の生活総体のなかで自然と対峙し伝承され観察して獲得された自然知の体系」〔篠原 一九九五 四〕を記述したものを「民俗自然誌」と位置づける。つまり、自然知を中心にして記述された民俗誌が民俗自然誌なのである。

篠原が目指そうとした民俗自然誌は、「量的な記載や分類学的な厳密性」を備えた「比較可能な民俗誌」であった。そのため、民俗自然誌の作成にあたって篠原がとった方法は、従来の民俗誌のように「聞き書き」によって得られたイーミックな視点によるデータだけで記述するのではなく、自然誌でみられるように「観察」によって得られたものを植物分類学や生態学的手法など客観的な方法を併用し、「聞き書き」と「観察」を等価のものとして扱いながら記述するというものであった〔篠原 一九九五 二六八〕。

このように、篠原が捉えようとする自然や環境は、人間の認識の中に形成され内在する自然や環境についての民俗知識やイメージであり、篠原はそれを民俗誌のなかに位置づけながら描こうとしたのである。野本の自然や環境に対する捉え方が、民俗事象とのかかわりをおして見ようとするものであったのに対して、篠原の自然や環境に対する捉え方は、人間の認識に内在する民俗知識やイメージとして扱おうとしていたのである。

この点に関して、福田アジオは野本の生態民俗学を「実態論としての自然と人間の関係」を捉えようとしたもの、篠原の民俗自然誌を「認識論、知識論のレベルで自然と人間の関係を捉えようとする」ものとし、両者は自然と人間の関係を捉えようとする点で共通するが、篠原の民俗自然誌では「主体としての人間」に重点が置かれていたことを指摘している〔福田 一九九二 一二〕。野本の生態民俗学と篠原の民俗自然誌とは、自然や環

境に関する捉え方が大きく異なっていたのである。

篠原による民俗自然誌の研究は、その後の海外でのフィールドワークの成果をふまえ、『自然を生きる技術—暮らしの民俗自然誌』（二〇〇五年）としてまとめられている。このなかで篠原は、中国雲南省や海南島、エチオピアのコンソ社会、日本の一本釣り漁師や里山で暮らす人びとの生活をとり上げながら、人と自然の関係を民俗自然誌として描くための方法論的な議論を展開している。そのなかで示された篠原の基本的な認識は、「自然と人間は技術を介して関係をとりむすぶ」ものであり、「この自然と人間の交通手段としての技術は、その技術を保有する人びとの自然観や自然認識とも深く連関している」〔篠原 二〇〇五 一八九〕というものであった。このような認識のもとで、篠原は「文化の中に立ち現れる人と自然の関係を民俗自然誌として叙述する方法」〔篠原 二〇〇五 二六〕を模索し、その結果として技術を介して人と自然の関係を捉えるという視点に辿り着いたのである〔篠原 二〇〇五 二〇五〕。このように、篠原の自然の捉え方は、「主体としての人間」の視点に立ちながら、技術^③を介して人と自然の関係性を見ていこうとするものであった。

三 鳥越皓之と環境民俗学

野本寛一は『生態民俗学序説』において「環境民俗学」成立の可能性を予見していた。しかし、それは「環境民俗学」という言葉の提示にとどまった。そこから一步先を踏みだし、内容をともなったものとして、環境民俗学を提起したのは鳥越皓之であった。鳥越皓之は『試みとしての環境民俗学—琵琶湖のフィールドから—』（一九九四年）において、環境民俗学の

具体的な構想を明らかにした。まず鳥越は環境民俗学の目的を、人びとの暮らしのなかで生まれ、受け継がれてきた共同の「生活の知恵」のうち、「環境に関わる分野を探求すること」〔鳥越 一九九四 ii〕とした。そして鳥越は、環境を自然環境に限定したうえで、「民俗学が対象とする『自然環境』はつねに、人間の手が加わった自然環境である」と捉える。そのうえで環境民俗学とは、「『自然環境』(加工された自然環境)と人間とのかわりのカラクリを民俗学的視点から研究する分野」〔鳥越 一九九四 iii〕であると位置付けた。

こうした視点にもとづき、鳥越は環境民俗学の研究分野(守備範囲)を三つに整理した。第一の研究分野は、「環境を殺さず、うまく人間の生活に利用しつづける」カラクリを伝統社会から見つけ出すことを課題とする「もので、いわば自然環境の利用に関わる分野である。第二の研究分野は、「環境と人間が相互のせめぎあいをし、そのなかでのすりあわせのごとく、そのすりあわせの有様をあきらかにしようとする立場であり、『環境』の側にも人間と同じ、主体性(人格)を認めているところ」に、この立場の特色」があり、いわば自然環境との共生に関わる分野ともいえる。第三の研究分野は、「環境を媒介とした人間相互の関係」を明らかにしようとする「ものであるが、「前二者ほどに視点(分析方法)が定まっていな分野で、今後の方法的展開が望まれる」とした。このように、鳥越は環境民俗学の研究対象と三つの研究分野を設定し、環境民俗学の骨格となるものを初めて明示したのであった。

自然環境と人間とのかわりのカラクリを分析するために、鳥越が提示した方法は「生活の立場」分析であった。この方法について鳥越は、「環境と民俗学」〔鳥越 一九九九〕および「民俗学的発想―村を美しくする計画

などない。良い村が自然と美しくなる」〔鳥越 二〇〇二〕のなかで具体的な事例を示しながら説明を加えている。鳥越のいう「生活の立場」分析とは、「その現象をそのときの生活の中に置いてみる」というもので、「生活の中に置いて、そこを掘り下げていつてある種の解釈をする」という方法であった〔鳥越 一九九九 八〕。ここで言う「ある種の解釈」とは「たんに『生活』を分析するのではなく、その人の立場に立った生活の分析」であり、「第三者の位置から分析するのではなく、その人の立場から分析する」〔鳥越 二〇〇二 五―六〕という方法である⁴⁾。

鳥越はこうした「生活の立場」分析の視点から自然と人間の関係性をどのように分析することができるのか、二つの事例を示しながら説明を加えている。ひとつの事例は、コイの漁撈についてである。もう一つは一本の柿の木をめぐる事例である。まずひとつ目のコイの漁撈をめぐる自然と人間の関係である。コイはたんに水中を泳ぎながら移動しているが、そのコイをどこで誰が捕るかによって、その意味あいが変わってくる。たとえば、コイは田圃や川や堀などを移動することで、その所有権を有する者が、個人であったり、組合であったり、神社であったりと、所有権者がさまざまに変わってくる。鳥越はこの所有権というものが、「コイと人間を結ぶ鎖の役割」を果たすものであり、この「鎖」に注目し、「自然と人間の関係性」〔鳥越 二〇〇二 一二〕を見ていくことを指摘した。

もうひとつは、柿の実をめぐる事例である。家の垣根から外に出ている柿の実、畑や水田の畦道に立つ柿の実、山の中の柿の実を取り上げ、柿の木が置かれている状況によって、柿の実を採る行動が異なることを例示しながら、柿の実に対する人びとの行動の背景には「暮らしのルール」ともいべきものがあり、「人間はあるルールを共通につくりあげて、それを守

りながら自然と共存している」〔鳥越 二〇〇二 一三〕ことを明らかにした。

このように、鳥越皓之の環境民俗学では、人間は生活のなかの所有権や暮らしのルールを通して自然とかわり合っていると見るのである。環境の捉え方でいえば、野本寛一の生態民俗学がいわば実体的な捉え方であり、篠原徹の民俗自然誌がいわば人間を主体とした認識論的な捉え方であったのに対し、鳥越の環境民俗学は、生活のなかの所有権や暮らしのルールといった、人びとの生活の立場とのかかわりから自然と人間の関係性を捉えようとするものであった。

四 菅豊と人と環境の民俗学

菅豊は『川は誰のものか—人と環境の民俗学』において、新潟県山北町を流れる大川を事例として取り上げ、コモンズという概念を手がかりとしながら、人と環境のかかわりに注目し、民俗学の立場から河川と資源の管理・利用について論じている。従来コモンズは、民俗学において馴染みの薄い概念であったが、菅は一九八〇年代以降、資源や環境管理の分野において頻繁に議論されるようになったコモンズを民俗学の研究に取り入れ、人と環境の関係性を考えていくための切り口とした。

菅はコモンズを「複数の主体が共的に使用し、管理する資源や、その共的な管理・利用の制度」〔菅 二〇〇六 八〕と規定する。そのうえで、大川のサケをめぐる人びとの共的世界について、近世から近代までを対象に歴史的・民俗誌的に詳述するとともに、川の資源をめぐる管理・利用の制度の生成と変容について考察した。そのなかで、菅は従来のコモンズ研究

においては、「コモンズのあり方が、自然環境や自然資源の『持続可能』性につながる」と期待され」ていたため、「そこでの中心課題は、人間と自然・資源との関係性」に置かれていたとする。しかし、菅はコモンズをめぐる「人間と自然・資源との関係性」は、「自然や資源を守ることを一義的なものとして生み出されたのではなく、「自然や資源を利用する人々の間の関係性を守ろうとするものであった」との認識に立ち、「コモンズ論ではまず最初に考えなければならぬのは、人間と自然・資源との関係性ではなく、人間と人間との関係性である」との考えを提示した〔菅 二〇〇六 九九—一〇〇〕。

ここからわかるように、菅は人と環境のかかわりについて二つの関係性を設定していた。ひとつは「人間と自然・資源との関係性」、もうひとつは「人間と人間との関係性」である。この二つの関係性のなかで、菅がコモンズを論じるに当たって重要と見なしたのは、後者の「人間と人間との関係性」であった。

こうした視点に立ち、菅は大川のサケ漁を事例としたコモンズの分析において、サケの資源利用をめぐる個人（イエ）・ムラ・地域（流域）・国家が絡み合う「コモンズの重層性」という点を指摘している。ここで「重層性」と表現されているのは、具体的には、資源の共的世界をめぐる地域社会の人間と人間の関係が「入れ子構造」になっているという指摘である。これは「環境を媒介とした人間と人間との関係性」についての指摘といえるものである。

ここで思い浮かぶのは、鳥越皓之が環境民俗学の提唱のなかで示した三番目の研究分野「環境を媒介とした、人間相互の関係」である。鳥越は三番目の研究分野に関して、他の二つの研究分野ほどには視点（分析方法）

が定まらず、今後の方法的展開が望まれるとした。菅が指摘した「入れ子構造」の人間と人間の関係性は、鳥越が提示した三番目の研究分野の課題に対するひとつの回答ともいえるものである。

五 環境民俗学の視点と漁撈研究の分析枠組み

これまで野本寛一・篠原徹・鳥越皓之・菅豊の四人の研究を取り上げ、それぞれの研究者の自然や環境に対する捉え方をみてきた。野本寛一は自然や環境を「民俗の生成基盤」と見なし、それらが民俗のあり方を規定するという認識に立っていた。野本が見ていた自然や環境は、実体としての自然や環境であった。篠原は認識の主体を人間に置いたうえで、技術をとおして「自然と人間のかかわり」を捉えようとしていた。篠原徹が見ていた自然は、実体としての自然ではなく、人間のなかに形成されるイメージや認識としての自然であった。鳥越皓之は、生活環境主義をベースにしなから、実践に重きを置いた立場から環境を捉えようとしていた。すなわち鳥越は、自然と人間をつなぐ「鎖」の役割を果たすものとして「生活のかなの所有権や暮らしのルール」を設定し、人びとの生活の立場から自然との関係性を見ようとした。そして菅豊はサケ漁がおこなわれる川の資源や環境をめぐるcommonsをとおして「自然と人の関係性」を捉えようとしたのであった。

最近の動向としては、自然や環境をテーマに取り組む民俗学・人類学・社会学の研究者らによって、新たな環境民俗学を模索する動きがある（山泰幸ほか編 二〇〇八）。そこでは「人と自然のつきあい方を多様性を重視しながら、なるべく要約や一般論でひとまとめにせず詳細化」（山泰幸ほか

編 二〇〇八 一〇六）する研究が試みられている。ここでは環境民俗学は「自然環境という切り口で民俗学研究をあらたに展開しようとする試み」、あるいは「人と自然の相互関係を考えるフィールド科学の共有地としての民俗学という立ち位置から、環境という現代的課題に取り組む」（川田二〇〇八 二九八）ものとされている。それは鳥越の環境民俗学を継承しながらも、具体的には「習俗」を人間と自然環境のあいだに位置づけ、「知識」「資源」「言葉」という独自に設定した三つの側面から人と自然のつきあい方を捉え直そうとするもので、ここでは「表象としての自然環境」が対象とされている（山 二〇〇八 七）。

このように、環境民俗学の位置づけや環境の捉え方は、研究者の学問的立場や研究目的によって異なっている。しかし、総じていえば、環境民俗学は自然環境を切り口とする民俗学的研究であり、その中軸に据えられている視点は「自然と人間のかかわり」であった。そして、研究者による方法上の違いは、何を媒介として「自然と人間のかかわり」を捉えようとするのかという点にあったのである。

つぎに「自然と人間のかかわり」という環境民俗学の視点から河川漁撈研究を進めていくにあたって、まず漁撈という生業活動がどのような活動であるのかを明らかにしておくかなければならない。一般に漁撈という活動は魚の習性にあわせて、さまざまな漁具・漁法を駆使しながら、目的とする魚を捕獲するという行為である。しかし、漁撈は魚を捕獲することだけでなく、漁場の確保や維持、魚とのつきあい方、他の漁師との相互関係、漁師としての生き方など、多彩な側面を合わせ持っている。

そうした漁撈という生業活動を環境民俗学の視点から捉えるためには、新たな分析枠組みが必要となってくる。この分析枠組みを設定するにあた

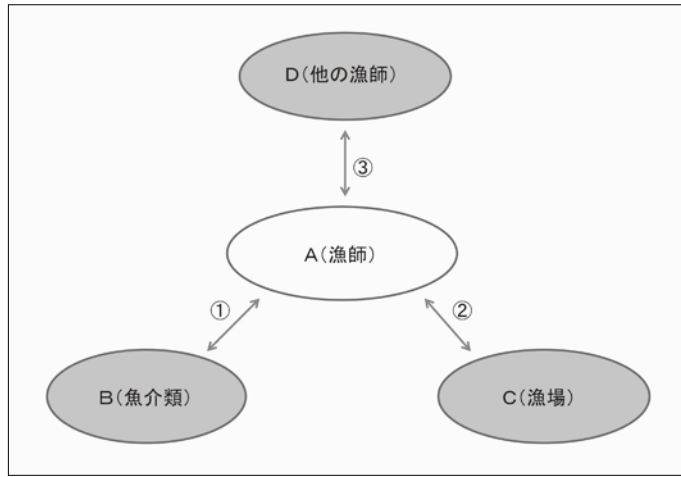


図1. 漁撈をめぐる三つの関係性

り、まず漁撈活動の構成要素ともいふべきものを見てみると、A漁撈の主体である漁師、B漁撈の対象である魚介類、C漁撈の場である漁場、D漁場を共同利用する他の漁師といった四つの要素が存在する。つぎに環境民俗学の視点として、その中軸に位置する「自然と人間のかかわり」、および鳥越皓之や菅豊により提示されている「環境を介した人間と人間の関係性」という視点をふまえ、漁撈活動の構成要素のつながりを見ていくと、そこに三つの関係性を見いだすことができる(図1)。それは漁撈活動の主体としての漁師を中心にしながら、①漁師と魚介類のかかわり、②漁師と漁場のかかわり、③漁師と漁師のかかわり、である。このなかで①と②は「自然と人間のかかわり」、③は「環境を介した人間と人間の関係性」に對

応するといえる。こうした要素間のつながりを、ここでは「漁撈をめぐる三つの関係性」と呼び、環境民俗学の視点に立った漁撈研究の分析枠組みとして設定することにした。

こうした分析枠組みを漁撈研究に導入することによって、どのような事柄を明らかにすることができるのであろうか。たとえば、①に関しては漁師からみた魚に対する認識、②に関しては漁師からみた川に対する認識、③に関しては漁撈・漁場をめぐる他の漁師との共同や確執などについて対象化することが可能となり、これまでの漁撈研究ではあまり手がつけられていなかった漁師の自然観・環境観・漁撈観さらには漁師の生き方など、漁撈をめぐるさまざまな事柄について探求していくことができると考えられる。そういった意味で、ここに提示した「漁撈をめぐる三つの関係性」は、環境民俗学の視点に立った漁撈研究を進めていくうえで有効な分析枠組みといえるのである。

六 問題設定と研究方法

以上の検討をふまえて、ここでは今後の河川漁撈研究にあたっての問題設定と研究方法について記し、まとめたい。まず今後の河川漁撈研究の問題設定であるが、前稿で指摘した研究課題をふまえ、次の三点に絞っていききたい。

- 一、川漁師は魚・川・環境をどのように捉えていたか。これは自然観や環境観の問題である。
- 二、川漁師は他の川漁師たちとどのように渡り合って漁撈をおこなっていたか。これは漁撈観の問題である。

三、環境変化のなかで川漁師はどのようにして漁撈活動を続けてきたか。これは生き方の問題である。

こうした問題設定にもとづき、環境民俗学の視点から導き出した「漁撈をめぐる三つの関係性」を分析枠組みとして、今後の河川漁撈研究を進めていくことにしたい。対象とするフィールドは、これまでその実態の解明が進んでいない淀川流域の河川漁撈である。右に示した問題設定にもとづき、川漁師の河川漁撈の世界を明らかにしていきたい。

そのための研究方法としては、流域区分にもとづき、淀川淡水域での川漁師の河川漁撈、淀川淡水域から汽水域に漁場を移転した川漁師の河川漁撈、淀川汽水域での河川漁撈について複数名の川漁師のライフヒストリーを捉えながら、川漁師の生活の総体把握を意識しつつ、河川漁撈によって暮らしてきた川漁師たちの河川漁撈の世界をみていきたい。ここでライフヒストリーにこだわる理由は二つある。ひとつは取り上げる河川漁撈が多くの場合、個人単位の漁であり、個人のライフヒストリーを追うことで、その漁のあり方が捉えやすくなるからである。また川漁師の生活の総体把握をめざすうえでも、ライフヒストリーを軸としていくことで、その手法が有効に働くと考えられるからである。

このように、ライフヒストリーに沿いながら、それぞれの川漁師の河川漁撈を「漁撈をめぐる三つの関係性」という分析枠組みによって捉え直すことにより、河川漁撈の主体である川漁師と魚、川漁師と川、川漁師と川漁師の関係性を分析し、これまで解明が進んでいない川漁師の自然観、環境観、漁撈観、環境変化による川漁師の生き方について解明していくことができるのではないかと考えられる。従来、河川漁撈の研究においては、漁具・漁法の側面に重きを置く傾向があったが、今後の河川漁撈研究では、

漁具・漁法中心の漁撈研究から距離を置き、環境民俗学の視点に立った河川漁撈研究を進めていくことで、民俗学的生業研究の課題といえる「人の生」についても新たな提言をおこなうことができるようになるのではないかと考える。

注

(1) 伊藤廣之「河川漁撈研究の課題―研究史と研究課題―」『大阪歴史博物館研究紀要』第一二号、大阪歴史博物館、二〇一四年。

(2) 野本寛一の「民俗生成論」は、すでに『焼畑民俗文化論』(一九八四年)なかで「民俗生成構造」論として展開されている。

(3) 篠原のいう「技術」とは「道具(機械)・身体知・自然知の総和」とされ、そのなかで「身体知」とは「経験的に獲得された身体を使う技法」(篠原 二〇〇五 一八九)、「自然知」とは野生動植物の利用に関する知識をさすものであった。篠原は技術を、道具・技・知識が一体となったものと捉え、そこに人びとの自然観や自然認識を探ろうとしたのである(篠原 二〇〇五 一八九)。

(4) 「生活の立場」分析は、鳥越らが『水と人の環境史―琵琶湖報告書』(御茶の水書房、一九八四年)において提唱した「当該居住者の立場に立つ」という生活環境主義の考え方にもとづくものである。鳥越は「生活の立場」分析について柳田民俗学に内在する方法であるとみている(鳥越 二〇〇二)。

参考文献

伊藤廣之 二〇一四「河川漁撈研究の課題―研究史と研究課題―」『大阪歴史博物館研究紀要』第一二号、大阪歴史博物館

川田牧人 二〇〇八「環境民俗学のこれから―これからの(ための)環境民俗学―『環境民俗学―新しいフィールド学へ―』昭和堂

- 篠原徹 一九八七「書評『生態民俗学序説』」『日本民俗学』第一七〇号、日本民俗学会
- 篠原徹 一九九〇『自然と民俗―心意のなかの動植物―』日本エディタースクール出版部
- 篠原徹 一九九四「環境民俗学の可能性」『日本民俗学』第二二〇〇号、日本民俗学会
- 篠原徹 一九九五『海と山の民俗自然誌』吉川弘文館
- 篠原徹 二〇〇五『自然を生きる技術―暮らしの民俗自然誌』吉川弘文館
- 菅豊 二〇〇一a「自然をめぐる労働論からの民俗学批評」『国立歴史民俗博物館研究報告』第八七集、国立歴史民俗博物館
- 菅豊 二〇〇一b「自然をめぐる民俗研究の三つの潮流」『日本民俗学』第二二七号、日本民俗学会
- 菅豊 二〇〇六『川は誰のものか―人と環境の民俗学』吉川弘文館
- 鳥越皓之編 一九九四『試みとしての環境民俗学―琵琶湖のフィールドから―』雄山閣出版
- 鳥越皓之 一九九九a「環境と民俗学」『民俗学研究所紀要』第二三集、成城大学民俗学研究所、のち加筆修正し「民俗学的発想―村を美しくする計画などない。良い村が自然と美しくなる」と改題し、鳥越皓之『柳田民俗学のフィロソフィー』東京大学出版会、二〇〇二年、に所収
- 鳥越皓之 一九九九b「環境民俗学」『日本民俗大辞典』上巻、吉川弘文館
- 鳥越皓之 二〇〇二「民俗学的発想―村を美しくする計画などない。良い村が自然と美しくなる」『柳田民俗学のフィロソフィー』東京大学出版会
- 出口晶子 一九九六『川辺の環境民俗学―鮭遡上河川・越後荒川の人と自然―』名古屋大学出版会
- 野本寛一 一九八七a『生態民俗学序説』白水社
- 野本寛一 一九八七b「生態民俗学の構造」『民具マンスリー』第二〇巻九号、
- 神奈川大学日本常民文化研究所
- 野本寛一 一九九四『共生のフォークロア・民俗の環境思想』青土社
- 野本寛一 一九九六「総説 環境の民俗」野本寛一・福田アジオ編『講座日本の民俗学4 環境の民俗』雄山閣出版
- 野本寛一 一九九九『人と自然と 四万十川民俗誌』雄山閣出版
- 福田アジオ 一九九二「民俗学の動向とその問題点」『日本民俗学』一九〇号、日本民俗学会
- 山泰幸・川田牧人・古川彰編 二〇〇八『環境民俗学―新しいフィールド学へ―』昭和堂
- 山泰幸 二〇〇八「いま、なぜ環境民俗学なのか？」山泰幸・川田牧人・古川彰編『環境民俗学―新しいフィールド学へ―』昭和堂

Viewpoint of environmental folklore and study of river fishery

ITO Hiroyuki

In this paper, the author focuses on folkloristic studies on nature and the environment that emerged in the 1990s and later: ecological folklore by Kan'ichi Nomoto, folkloristic natural magazine by Toru Shinohara, environmental folklore by Hiroyuki Torigoe, and folkloristic study on people and the environment by Yutaka Suga. The author reviews the discussion points of the respective studies.

The author summarizes the three viewpoints of environmental folklore presented by Torigoe into two viewpoints: (i) “interaction between nature and people” and (ii) “interaction among people” via the environment, while referring to the viewpoint from which Suga conducted studies on commons.

Finally, the author builds the analysis framework for studying of fishery and shows three subjects for studying of river fishery.